OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | タイの大学院教員による研究指導の困難点と課題 ：指導大学院生の研究テーマ決定過程に着目して |
| Author(s) | 村岡, 貴子; Na Ranong, Soysuda |
| Citation | 大阪大学国際機構研究論集. 2026, 30, p. 59-70 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/104089 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# タイの大学院教員による研究指導の困難点と課題

## ―― 指導大学院生の研究テーマ決定過程に着目して ――

村岡　貴子*・Soysuda Na Ranong†

**要　旨**

大学院での研究指導に関する困難点と課題を明らかにするために、本稿では、萌芽的な質的調査研究として、修士論文や博士論文の指導を行っている大学教員に対して事前の質問紙調査を行ったのちに半構造化インタビューを行った。調査協力者はタイの3つの国立大学の大学院で研究指導を担当する4名のタイ語母語話者教員である。本稿では、調査結果のうち、指導する大学院生が研究テーマを決定するまでの研究指導上の困難点とその背景事情を取り上げる。調査の結果、協力者は共通して、論文スキーマが形成されていない大学院生の研究テーマ絞り込みの段階で種々困難を抱えていた。特に研究の位置づけを行いテーマと方法を決定する際には、先行研究の読解の方法が十分ではない点が指摘されていた。対応としては、各教員は大学院生の背景に留意した個別指導を工夫していた。教員は、共通して、各種の問題に対する解答や選択肢をすぐに提示せず、大学院生に何度も深く思考することを促し、メンタルケアにも注意を払っていた。

**【キーワード】**タイ、大学院生、研究指導、研究テーマ、困難点、論文スキーマ

## 1　研究の背景と目的

本章では、研究の背景として、関連する先行研究を示した上で本稿の位置づけを行い、目的とリサーチ・クエスチョンをそれぞれ示すこととする。

一般に、大学院生が研究活動を行い、学位論文を執筆していく過程では、論文のテーマ決定から完成に至る間にさまざまな段階が存在し、1年単位の長期間が必要とされる。こうした長期間を要する研究活動の過程に着目した質的な事例研究であるSoysuda・村岡（2024）、村岡・Soysuda（2024）においては、調査協力者であるタイの大学院生は修士論文や博士論文の執筆に向けて、テーマ決定から論文完成に至るまで種々の困難点を有し、それらを克服するために研究上の経験を蓄積していく状況が具体的に示されている。そこでは、当該の大学院生が、論文や研究とは何かの概念知識の総体である論文スキーマ（村岡2014）を形成していく過程の難しさが明らかにされている。

それらの議論を受けて、上記のSoysuda・村岡（2024）、村岡・Soysuda（2024）では、研究指導を行う大学院教員側に期待される必要な研究支援について、個別対応の局面を超えたマクロな観点から議論し、指導の一環であるセミナーのあり方や、他者との協働の有用性についても指摘を行った。

上記の通り、大学院生の抱える困難点や、教員に必要とされるマクロな観点からの支援のあり方については、徐々に明らかにされつつある一方で、教員自身も、大学院生の論文が完成するまでの研究指導の各段階で種々の困難を抱えていることが推測される。ここでの各段階とは、研究テーマの設定や方法論の選択、データ分析や考察、結論の提示等、論文

* 大阪大学国際機構国際教育交流センター教授
† タイ国 カセサート大学人文学部元准教授

完成と成果発表までの各々の段階を指すものとする。それらの段階に見られる困難点には、指導する個々の大学院生の背景や研究テーマが異なっていても、指導上共通する側面があるものと考えられる。

研究指導に関連し、従来、日本語教育学や関連分野のアカデミック・ライティングに関わる論文執筆のガイドや指導マニュアルに相当する啓発的な書籍は多々刊行されてきた（例：石黒（2021）、佐渡島他（2021）、甲田2024、佐渡島他（2025）等）。これらの知見に対し、指導経験を持つ教員は、必ずしも明文化されていなかった困難点や指導上の工夫について共感する点も多々あるであろう。

また、向井（2018）は、東京大学の人文社会系研究科・文学部における論文作成のための大学院科目、各種講座や交流会等、研究する大学院生を支援する実践や取り組みについて紹介し、その運営の内容と方法の課題を示している。これらは、指導教員の個々の対応ではなく、研究科における組織的な支援体制・指導体制の充実をはかるものである。

他方、教員個々人が抱える困難点や課題を明らかにした質的分析を中心とした先行研究は、村岡・Soysuda（2024）で示した通り、看護学研究の一部（例：中山・舟島2023）を除き、管見の限りほとんど見られない[1)]。中山・舟島（2023）は、「修士論文の作成過程において教員が指導上直面する問題は国内外ともに未解明である」（p.39）と指摘する。上記の先行研究は、村岡・Soysuda（2024）が議論したように「看護系という現職者を含む社会人大学院生による「経験」をもとに、研究活動の困難さや指導教員との相互行為、大学の環境について広く議論を行ったものが多く、看護現場の実務も研究に深く関与する（p.96）」ものである。昨今は、日本語教育学や関連分野においても、社会人で大学院に入学するケースもあり、本稿においても、ほとんどの協力者が社会人大学院生に関しても言及している事例がある。

今後も大学院生の背景の多様化が進むと予測される中、大学院生の論文スキーマ形成を目指した実際の研究指導の各場面で、教員による可能な方策や具体的な行動はどのようなものであり、また、教員が研究指導上、日常的に、あるいはしばしば抱える困難とはどのようなものなのか。それらについての解明を行う研究は必要であると言える。そのような研究の蓄積は、今後の研究指導の円滑化やアカデミック・ライティング教育に広く知見を提供するものと期待できるからである。

ただし、一般に、大学院教員が各々関与する研究科や専攻、講座の中で定期的に意見交換や情報交換を行う機会が無い限り、個々の研究指導上の問題は、通常その教員が孤軍奮闘する場合が少なくないと思われる。そのため、上記のよう大きな研究課題に向かうためには、まず、教員の視点からの実際の研究指導上の問題・課題を具体的に、かつ質的に明らかにする研究が必要である。その際に、本稿では次の２つの視点から問題の細分化をはかっていきたい。

１点目として、大学院生の研究テーマ決定から論文完成までの研究活動の段階によって困難点が異なる可能性が十分に考えられる。大学院生（以下、院生）が従事する研究活動全体を捉えれば、院生が、先行研究にアクセスして研究の概観を行った上で、実現可能な研究テーマを適切に絞り込み、適切な研究方法を見極め、調査や実験を行って結果を導き出し考察を深めるという長い過程が存在する。その長い過程においては、院生が自身の希望に沿って研究テーマや方法を決定するまでの段階があり、次に、そのテーマのもとで、調査や分析・考察を行っていく過程が存在する[2)]。

各々の過程においては、教員が関与するセミナー[3)]（ゼミ）や個別指導と言われる機会等、さまざまな局面が存在する。場合によっては、研究テーマの絞り込みに長期間を要し、テーマが円滑に決められない場合もあると推測される。そのような場合には、教員が、院生のメンタル面でのケアが必要と判断する場合もあるだろう。

２点目は、教員が抱える困難点の質が異なる可能性である。すなわち、教員が抱える問題・課題は、研究指導全体の過程において、同様、あるいは類似の困難が継続するものと、指導院生の成長に伴って指導の負担が軽減されていくもの、という質の異なる両者が存在する可能性がある。研究テーマ決定過程においては、もともと入学前からテーマを決め、それをもって、実現可能な方法論も確定して研究を遂行していく場合も存在するが、一方で、テーマ決定が遅々として進まない場合は、論文スキーマの形成が遅く、具体的な調査に入る前に長期間を要することもままある。そのような背景から、本稿では、それらを質的に分析して明らかにする必要があると考えるに至った。

本稿は、上記の、研究指導の段階、および指導困

難点の質とその変化という２点の視点を持ち、次の通り、２点のリサーチ・クエスチョンを設定する。

① 大学院生が具体的な研究テーマと方法を決定するまでの過程でどのような指導困難点があるか。
② 上記①の困難点に対して、教員はどのように対応しているのか。

以上のリサーチ・クエスチョンへの解答を求め、本稿では、実際に大学院生を指導する教員への調査を半構造化インタビューの形式で調査を行った結果と考察を報告する。

報告に際し、次章以降では、まず、調査協力を得た４名の教員に対する、事前の基本情報を尋ねたアンケート調査の結果の概要を示す。続いて、研究指導の前半部にあたる段階として、大学院生の研究テーマと方法の決定過程に焦点を当てて考察を行う。研究テーマと方法の決定過程の詳細については、協力者４名に対するインタビュー結果を、質的分析に適したSCATの手法（後述）を援用して考察を進めることとする。

なお、筆頭著者の所属先大学において、研究倫理申請を行い、承認された上で調査を実施した。

## 2　調査の概要

### 2-1　調査協力者

本研究の調査協力者は、機縁法により選定したタイの国立大学大学院に勤務する指導教員４名である。このうち３名が女性で、１名が男性であった。表１に協力者の基本情報を示す。

表１　調査協力者の専門分野および指導経験年数

| 協力者 | 専門分野 | 指導経験年数 |
|---|---|---|
| A | 日本語教育学 | 10年以上 |
| B | 日本語教育学 | 10年以上 |
| C | 日本文化論<br>日本語学 | 10年以上 |
| D | 日本語教育学 | 10年以上 |

表１の通り、全員の年代が50代以上であり、大学院での研究指導経験を10年以上有する、いわゆるベテラン教員である。専門分野は３名が日本語教育学、１名が日本文化論および日本語学であった。

本研究は、先行研究（Soysuda・村岡，2024；村岡・Soysuda, 2024）の成果に基づき、指導教員である調査協力者が調査の質問項目に対して、どのような共通した困難を抱え、指導や支援を行っているかについて探索的に検討を行う。協力者は少数であるが、質的に深く分析する意義を持つものと考えられる。

### 2-2　調査の方法および分析手法

調査はオンライン形式による質問紙調査として、2025年６月中旬に実施した。その後、各協力者に対してオンライン形式による半構造化インタビューを行った。インタビューでは、協力者一人当たりおよそ１時間から１時間半程度の時間を要した。インタビューの録音データは文字化し、質的分析に適したSCAT（大谷2008）の手法を援用して考察に資することとした。SCATを援用する理由は、協力者が少数で、データの継続的収集が難しく小規模なデータ（大谷2008）を深く読み込むために有用で、かつ、本研究のように、複数の研究者が共同で可視化されたデータを分析しやすいためである。

SCATによる分析方法は大谷（2019, p.271）によると、セグメント化したデータを記述し、４段階のコード（〈1〉データの中の注目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのテクスト外の語句、〈3〉それを説明するようなテクスト外の概念、〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念、を順番に付し、その後、〈4〉の「テーマ・構成概念」を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きをとるものである。本稿におけるストーリー・ラインとは、上記の〈1〉から〈4〉の４段階のコーディング作業のうち、〈4〉で取り出した「テーマ・構成概念」を紡ぎ合わせて、「データに記述されている出来事に存在する意味や意義」を書き表したもの（大谷2008, p.32）である。巻末に資料としてSCAT分析の事例の資料１として示す。

次に、調査協力者には事前に調査の目的・概要および個人情報やプライバシー保護についてＥメールを通して個別に説明し、その後、調査協力への同意書を受領した。

アンケートおよびインタビューの各項目は、個人情報や研究指導の概要、指導院生の人数、研究テーマの発展状況などに関する質問に加え、大学院生を指導する際に教員が感じる困難点や課題について尋

ねる内容であった。質問紙調査の内容は、個人情報を除き、表２の通りである。

表２　質問紙調査の質問項目

| 質問内容 |
|---|
| 1．現在の研究方法はどのようなものですか。以下から選んでください。<br>（　　）定量的研究<br>（　　）定性的研究<br>（　　）上記の両方 |
| 2．大学院生への研究指導の方法（複数回答可）を以下から選んでください。<br>（　　）個別指導<br>（　　）セミナーor ゼミ形式<br>（　　）その他（：具体的に　　） |
| 3．上記2.）での研究指導の頻度はどの程度ですか。以下の【　　】に数字を書いてください。<br>１か月あたり【　　】回程度<br>１学期あたり【　　】回程度<br>その他（：具体的に　　） |
| 4．現在までの過去10年以内の１年あたりの平均的な指導院生数はどのくらいですか。以下の【　　】に数字を書いてください。<br>修士レベル【　　】名　　博士レベル【　　】名 |
| 5．現在までの指導院生の中で、どのくらいの数の方が修了できましたか。正確な数がわからない場合には、何名程度、あるいは何名以上、という表現で書いていただいても結構です。<br>修士レベル：【　　】<br>博士レベル：【　　】 |
| 6．現在の指導院生の数を教えてください。【　　】名 |
| 7．現在の指導院生の研究テーマでは、各人が順調に研究を発展させていけると思われますか。<br>（　）全員研究を順調に発展させていけると思う。<br>（　）研究の順調な発展は全員難しいと思う。<br>（　）人によってはかなり異なると思う。<br>（　）どうなるか先がなかなか読めないと思う。<br>（　）その他（：具体的に　　） |
| 8．現在まで院生を指導してきた中で、指導上の困難点がありますか。〈複数回答可〉<br>（　）過去も現在も困難点がある。<br>（　）院生によって指導上の困難点が多様で異なる。<br>（　）修士論文や博士論文の作成過程において指導上の困難点が多様で異なる。<br>（　）困難点はほとんど無い。<br>（　）その他（：具体的に　　） |

表２の通り、質問は合計８項目で構成され、指導院生の研究方法、教員自身の指導方針、研究指導の頻度、指導院生の研究の進捗や困難点などについて尋ねたものである。

また、インタビュー調査における質問項目は、アンケート調査の結果を確認した後、大まかに分けて次の３点である。すなわち、1）多様な指導困難点の背景と対応、2）論文執筆に関する問題点と背景、3）論文指導時の工夫である。このうち、院生の研究テーマが決定するまでの過程に焦点を当てる。本稿では、次節において、まずアンケート調査の結果を報告し、次に、インタビュー調査の結果について、SCAT を援用しつつ、質的な分析・考察を行う。

## 3　結果と考察

### 3-1　質問紙調査への回答

質問項目１～８への具体的な回答のまとめは以下の通りである。

回答１：協力者のうち、２名が定量的研究、１名が定性的研究を選択し、１名は両方を選択した。

回答２：全員が個別指導を選択し、その上で３名はセミナー（ゼミ）形式での指導方法も選んだ。

回答３：３名の協力者は、指導頻度を「１か月あたり１回程度」と回答した。一方、１名は「指導する院生によって異なる」と回答した。

回答４：１年間あたりの平均的な指導院生数は、修士レベルでは１～４名、博士レベルでは０～２名であった。

回答５：これまでに指導を終了した院生数は、修士レベルでは５～20名程度であった。一方、博士レベルでは、協力者が指導した院生の中で博士学位を取得した者はまだいない。

回答６：A の現在の指導院生数は９名、B は４名、C は０名（平均して毎年3,4名だが調査時点では０名）、D は７名であった。

回答７：３名の協力者が「人によってはかなり異なると思う」を選択し、１名は「その他」と回答した。「その他」を選んだ協力者によれば、社会経験のある学生の方が研究や論文執筆において成功しやすい傾向があるという。

回答８：全員が指導上の困難点があると回答した。具体的には、２名が「過去も現在も困難点がある」「院生によって指導上の困難点が多様で異なる」「修士論文・博士論文の作成過程において困難点が多様で異なる」

の３項目を選択した。一方、残りの２名は最初の２項目を選択した。

以上の回答のまとめに共通する点は、いずれの協力者も指導院生への丁寧な指導・支援を重視している一方で、指導における困難を抱えていることである。また、その困難は、院生によって異なるという回答が４人中３人に見られ、かつ、困難点は多岐にわたることが判明した。

### 3-2　インタビュー調査の結果

#### 3-2-1　研究テーマ決定までの多様な指導困難点

４名の教員ともに、指導困難点の多様さについて言及していた。特に先行研究の概観が適切に行えないために自身の研究の位置づけに苦慮し、そのために希望する研究テーマの設定が行えないケースを指摘していた。協力者Ａから順に、ストーリー・ラインを示しつつ考察を行う。

> 院生は、【リサーチ・クエスチョンの設定の困難さ】を感じている。本来的に【先行研究の概観と自身の研究の位置づけの重要性】が指摘できるが、院生の問題は【先行研究の熟読】が不十分なことである。院生は、【自身の興味のみに依存したテーマ設定】を行うことがあり、【先行研究との関連付けの不足】が適切に行えない。そのような状況で、一般に【テーマ設定を急ぐ「せっかちな」学生】が多く【テーマ決定への検討不足による問題の深刻化】が指摘できる。

Ａは、上記の内容を次のような語りで示していた。以降、下線は特に考察で主に言及する点を示すものとする。

> ほんとはもちろん全ての過程において、どの段階も難しいと思いますけれども、その中で特に難しいと思うのはやっぱり最初のリサーチ・クエスチョン、問いの設定ですよね。自分の興味、例えば、Ｘのテーマを選んでも、先行研究との接点、接続が曖昧なままだとなかなか深まりませんから。そういう場合はしっかりと文献、先行研究とかをしっかり読んでもらって、自分の研究はどこに位置付けられるか、それを明確にしてからじゃないと大変だと思います。それが一番難しいかな。
>
> たまたま自分が見たものとか、聞いたり教わったりしたことをそのままテーマにして、よく勉強せずに。あるいは自分、私こんなことに興味がありますって、そういうことだけでもう選んでしまう。先行研究とかちゃんと読まないで選んでしまうという学生がとても多いですね。（中略）
>
> 学生って結構せっかちというか、私早く決めたい。書きますとか、論文書きますとかそういう人が多いから。でも、そうすると後で大変なことになりますから。

以上のように、Ａによると、学生は【先行研究の概観と自身の研究の位置づけ】を円滑に行えず、研究テーマ、リサーチ・クエスチョンの設定が難しいケースが多いという。Ａは、研究の各段階の中でも、研究の位置付けを行うテーマ設定が最も難しいものと考えている。

また、Ａは、先行研究の十分な検討を行わずに研究を進めようとする「せっかちな学生」が多いと指摘している。そのような学生は論文スキーマが十分に形成されていないため、自身の研究の位置づけを行う重要性がよく理解できないまま、早くテーマを決めて、実験や調査の作業を急ぐ傾向があるケースであると言える。最後の下線の通り、難しくてもその段階を乗り越えなければ、「せっかちな学生」の場合、後で「大変なこと」になると認識している。

次に、Ａと同様に、Ｂも、院生の研究テーマ決定まで辛抱強く指導を続けているが、なかなか決まらないこともある。テーマ決定後も、方法論の問題も付随して生じることにも言及している。Ｂのストーリー・ラインを以下に示す。

> 教員は院生の【研究課題決定の困難さ】を見極めている。研究課題が決まった後も、【研究の方法論】については【信頼性・妥当性に鑑みた方法の決定】を行う必要がある。また、【指導助言を行う場合】にも困難点がある。指導助言を行っても、再度【新たな研究テーマの提示】が行われるため、【指導の意味の再考】を促されるような気持ちにさせられる。

Ｂは、指導を繰り返しても、院生がそこからテーマを絞り込む深い思考に進めずに、【新たなテーマの提示】を行う行動をとることを指摘している。Ｂの

語りの部分を以下に抜粋する。

もう研究課題そのもの決まらない。研究課題決めたら決めたで、人によっては、もう研究方法論、特に何をもって調査していくのか、それをしっかりと特に今現在だと信頼性、妥当性のこととか、どういう方法でそれをはかっていくのかみたいなこともしっかりと考えないといけないし、やらなきゃいけないということなので、難しい。

上記のBの語りのように、人によっては研究課題や方法論を決定する段階での指導に困難を抱える院生のケースのあることが示唆される。そのことは、当該教員に対して指導の意味を問い直す状況に置くこととなる。このような場合、教員の心理的負担は小さくないものと推測される。

また、Cも研究テーマの絞り込みが困難なケースを経験しており、指導の困難さを示していた。Cのストーリー・ラインは以下の通りである。

> 院生の中でも、【現役の教員で明確な研究テーマを持つケース】があり、その場合は、【自身の興味】や【職場で有する研究課題】を持っており、研究テーマ設定は必ずしも困難とまでは言えない。一方、社会人の経験のない、他の若い学生の場合は【研究テーマの絞り込み作業】がなかなか進捗せず、それが最も困難な作業として続くものと感じている。

Cは、自身の指導経験から、社会人経験があり研究に関する問題意識を持つ院生は、研究テーマの決定が難しくないものの、そうではないケースは、テーマの決定、絞り込み作業がかなり難しいと実感している。また、その【研究テーマの絞り込み作業】が進まないケースは最も困難で、それが続くものであると述べている。

Cは、このような院生の様子について、次のように語っている。

大学を終わって修士をやる学生はほとんどなので、まだ若いんで経験もあまりないので、だから何をやるかその研究のやり方も分からなくて（中略）、そういうテーマは何をすればいいか、そういうのがほとんどでした。

上記の語りのように、学部を卒業してすぐに修士レベルに在籍する院生の場合は、若く「経験もあまりない」人達で、論文スキーマが十分に形成されておらず、研究テーマやそれに関連する方法の決定にも、研究の初歩から指導を行っていく必要があることがうかがえる。

さらに、Dについても、テーマが円滑に決まらず時間を要する場合について他の協力者と同様の経験を有している。ストーリー・ラインは、以下の通りである。

> Dは、【入学時の意欲と研究の見通し】が必ずしも同様には展開せず、【実際との差】を強く感じるケースがあるという。研究テーマを決めるまでの時間が長くなり、【大学院修了に関する楽観視】が見られるようになる。予定通りに大学院修了が実現しない場合でも、【2年で修了不可の場合に対する低い心理的ハードル】が観察され、修了までの期限を先延ばしにする選択への抵抗がないケースもある。

このように現実的に、問題を抱える院生は、入学時の見通しとは異なる局面に遭遇することとなり、そのことは【大学院修了に関する楽観視】につながることとなる。2年で修了できなくなる事態に対しても、教員であるDが想像する以上に院生は心理的ハードルが低いという。Dは、このようなケースについて次のように語っている。

多分、入った時点では、みんなやる気があって「2年で終わります」とか「2年で卒業できると思います」が、そういう言ってたんですが。（中略）ちょっとやっぱりね、入ってきて、例えば、研究テーマがなかなか定まらないとか、いろいろなことがあって「2年じゃなくてもいい」みたいな。で、多くても3年で卒業したいなとか、そういう学生があったりするんですけれども。

上記のように、研究テーマ決定のタイミングや難しさが、その後の在籍期間にも影響を及ぼしかねないケースについて、「2年じゃなくてもいい」と考える院生と教員の感じ方に温度差のあることが示唆される。研究テーマの決定までの過程については、院生によるものの、入学時には論文スキーマが形成さ

れていない状態で、「やる気があって」楽観的な見通しを示すケースが存在することがわかる。その場合、相当の期間を要しても決定まで困難が続く状況が見受けられるという。

以上、4名の協力者はいずれも、研究テーマ決定自体が研究のその後の遂行には極めて重要であることを共通認識として持ち、かつ、種々困難なケースを経験しており、その深刻さも実感している。また、研究テーマが決まらない場合、院生が楽観視したり、十分に検討せずに調査や実験の段階に移ろうとしたりするケースもあるという。その後の研究全体の計画変更を余儀なくされた結果、在籍期間の延長につながる事態についても言及があった。

さらに、協力者Aが語っていたように、「せっかちな学生」が少なくない現状に対して、教員は院生に対し、本来、自分の研究がその専門分野のどこに位置付けられるかを明確にするために、先行文献の読解が非常に重要であることを理解させようと尽力している様子がうかがえた。本来、研究テーマ決定は、研究活動の最初の段階で、研究自体の位置付けに関わる重要な過程を必要とする。その過程には、先行研究を概観する段階が含まれ、そこにおいて深く批判的に文献読解が行えるか否かが、研究の位置付けを適切に行えることの成否に繋がるものである。

次の節では、テーマ決定までの過程において、種々の困難への対応方法に絞って議論を進めていく。

### 3-2-2　テーマ決定までの過程における困難点への対応

協力者Aは、院生がテーマ決定に時間を要する場合の指導過程において、院生個人の個性を重視し、可能な限り自律的に研究が行えるよう支援をするという姿勢を堅持し、次のように留意している。

> 難しいケースへの指導に際しては、【大学院生が持つ個性や背景の尊重】を心がけ、【教員と大学院生が協働しつつ検討する姿勢】を重視している。そこで目指すものは、【学生の自律性涵養への支援】である。また、【現代の学生気質への配慮】を行うようにし、【教員からの具体的なフィードバック】を行う際に、【学生への肯定的な評価の言葉】も忘れず加えるようにしており、【厳しいコメントの回避】を行い、【婉曲的なコメントの表現】を用いている。

Aは以上のような指導に際しての心構えについて、次のように語っている。

> 学生の個性やバックグラウンドを尊重することですかね。あと一緒に考えるという姿勢ですね。指導というよりも、学生が自分の力で考えて自律的に進められるように支援することを心がけているつもりです。（中略）あと今の学生って先生のほうから押し付けるということもたぶん嫌がってると思いますので。なるべく一緒に考えて、あなたはどうしたいか、このようにしたら後でどういう問題が出てくる可能性があるのか一緒に考えて。あとフィードバックとかも、なるべく具体的なコメントとか肯定的な言葉。何かいろいろ気を付けないといけないですよね。（中略）厳しいこともあんまり、婉曲的に言う。

Aは、以上のように、指導の際に、テーマがなかなか決まらない場合においても、院生とともに考えることを心がけ、指導中に発する言葉も、肯定的に、また厳しくなく婉曲的なものを選ぶように努めている。このように、Aは学生が自ら深く思考する姿勢を涵養することを目指し、かつ、学生が前向きに研究活動を継続できるよう、コメントの提示の仕方も含め、学生とのコミュニケーションの方法に心を配っている様子がうかがえる。

次に、Bは、以下のストーリー・ラインの通り、院生に自分で考えさせるように強く促すポリシーを有している。

> Bは指導院生に対し、【研究能力への内省】を促すことを心がけている。そのような内省を十分に行った上で、院生が自ら【実施可能な研究活動の見極め】が行えるように導くことを重視している。このような指導において、Bは、院生が、他者から指示されて行動するのではなく、【研究へのモーティベーション】を持ち続けることが非常に重要であると認め、それがなければ、研究の遂行自体が難しくなると考えている。

Bはこうして学生に自身で検討させる必要について、次のように語っている。

> 「これやりなさい」って言ってできなかったら意

味がないし。これはどうですかっていうこと、これも検討してやってみて、自分でできるところ。できる、できない、この選択肢の中、自分のまずできることを選択して一生懸命取り組んで、できない部分は一生懸命やればできるものなのかどうかの検討も含めてやる。その気力っていうか、やる気っていうことも、（中略）博士もそうですけど、修士もなければなかなか終わるもんじゃないと思います。

Bは、院生に対して、自身が実現可能か否かの選択肢を認識し、自分で決定するための意欲を持ち続けることが重要であるという信念を持っている。その信念は、研究指導全体の信念を貫くものであり、指導上、院生が自ら選択し、行動する姿勢を涵養する姿勢を堅持している。

その中で、研究テーマの決定が難しいケースでは、安易に選択肢を勧めることはせず、学生に対し、熟考を求め続けようとするものであると言える。

また、Cは、研究指導において、院生に対し、丁寧に目的やリサーチ・クエスチョンに関する説明や支援を行っているが、院生側の問題やこだわり等にも遭遇し、人によって対応を変更する必要性を強く感じている。

研究テーマに関しては、【テーマのためのキーワード検索】について説明したり、【論文の検索と読解】を促したりしている。【リサーチ・クエスチョンと目的についての指導】を行っている過程では、【実際の研究手法に対する学生の希望】があり、中には【リサーチ・クスチョンの変更】を行う場合もある。それは、テーマというより、【研究の目的により選択する方法】の変更の場合である。【学生の限界やこだわり】がある場合や、在学中に残された【時間の問題】もあるため、【目的の変更】や【テーマの変更】に踏み切らざるを得ない場合が存在する。

上記のように、Cの場合は、テーマ決定の過程で、論文やキーワードの検索方法について教示し、かつ、必要な論文の読解を行うように指導している。一方で、院生の中には、その過程において、定量的あるいは定性的といった方法論に関して希望や好みがあり、そのためにリサーチ・クエスチョン自体を変更する場合がある。つまり、テーマから方法を選択していくのではなく、こだわりの方法を選択してテーマを再検討することがある。同時に、残された時間の制約のために、現実的に妥協をして目的やテーマを変更することがあるという。Cは次のように語っている。

よくできた学生はやっぱり先行研究もちゃんと理解しているんですね。やっぱり自分の研究はここに位置付けるか、そういうのは多分分かっていると思います。ちゃんとリサーチ・クエスチョンもはっきりできる子はよくできる。（中略）

研究の目的によるんですね。どっちの方法を選ぶか、その学生の限界があるのかそういうこだわりがあるのか、そういう理由いろいろありましたね。（中略）

最初に量的しようよとかそういう研究にふさわしいよとか、そういうのは勧めたんですけども量的はやりたくないよと。もう時間がないんですからこういうのが答えがあったから、じゃあ変えよう。そういう目的とか変えられなくて、だからテーマを変える。そういうふうなことになっちゃったんです。

このように、Cの経験したケースでは、院生が希望する、あるいはこだわる方法論の変更によって、テーマの変更をも余儀なくされる場合があることがわかる。つまり、Cは、先行研究の概観や研究の位置づけについて理解できている学生もいるとした上で、一方では、研究の目的により方法論の検討を行うべきであるところ、学生による方法の好みによりテーマを変更せざるを得ないケースがあったことを、適切ではなかったと認識していた。

最後に、Dの場合も、教員自身が対応に苦慮したり、逡巡したりするケースが紹介された。Dの場合もCと同様に、方法論の選択が関係するケースである。次にストーリーラインを示す。

研究テーマを決定する際に、【方法の選択の難しさ】がある。例えば、【アンケート調査の場合の協力を得る難しさ】があり、一方で【インタビューの難しさ】やその際の【研究倫理の申請の煩雑な手続き】を避けるケースが存在する。つまり、【テーマ選択より方法選択の難易度を優先する大学院生】のケースが存在する。そこで、【自身で問題発見や考察が困難な学生】については、【院生の論文スキーマに合わせた指導】を行っている。

Dによると、アンケート調査かインタビュー調査かによって、テーマの選択が大きく影響を受けるという。つまり、院生によっては、定量的にアンケート調査を行いたいか、研究倫理等の手続きが煩雑だと思ってもインタビュー調査を行いたいか、等、院生によってさまざまである。つまり、【テーマ選択より方法選択の難易度を優先する大学院生】のケースがあるわけである。Dは、このことに関連して次のように語っている。

まず方法の選択も難しいし、そして、大体データ収集の場合は、例えば、アンケートの場合は、あんまり協力いただけないとか、そういうのもあったりして。もちろんインタビューも難しいし。また、あとインタビューとかすると、研究倫理の申請とか。（中略）

「自分の論文ですから、自分で決めてください」とか、そういう、どうしてかちょっと私にも分からないんですよ。答えられないんですけども、だから、そういう経験がないから、問題発見、経験がないので。（中略）

学生も、多分、入った時点で、あんまり背景知識がないんですよね。だから、どっちにしても行けるって、自分で思ったりするんですよ。多分、例えば、言語学とか、何しても、いいんですけども、言語学の先行研究をたくさん読んだりすると、問題発見とかできると思うし、そういう言語の世界に入れるんです。多くの学生はないんですよ、そういうの。日本研究でもいいんですけど、日本文学でも何でもいいんですけど、ないんですよ。どっちにも行けるって、自分で思ったりするんですね。それ、違うんです。

以上のように、Dは、研究テーマと方法の決定に際して、院生によっては、その決定が難しく、教員を頼ろうとする場合があることを示唆し、院生の反応を心配しつつも、基本的には院生がテーマと方法を決定するものとして明確に伝えている。また、問題のあるケースは必ずしも多いとまでは言えないとしつつ、「背景知識がない」ため、テーマとする分野の先行研究の文献を多く読むことでその分野の世界に入れるとし、文献の十分な読解を勧めているものと考えられる。

## 4　結論と今後の課題

本稿で最初に設定した研究課題各々を、以下に再掲する。次に、以下２点への回答をまとめて本稿の結論とし、さらに今後の課題を記述する。

① 大学院生が具体的な研究テーマを決定するまでの過程でどのような指導困難点があるか。
② 上記①の困難点に対して、教員はどのような対応を行っているのか。

まず、前提として、アンケートとインタビューの両調査の結果、４人の協力者は全員、院生が研究のテーマと方法を決定するまでの間、共通して難しい対応のケースを経験していた。また、院生の背景の多様さに鑑みて、研究指導の困難点も多様であると捉えられていた。さらに、研究テーマの設定自体が、付随する方法の決定も含め、研究活動全体の中で、きわめて重要な位置にあり、それらが適切に行われなければ、その後の研究活動に深刻な影響を及ぼすものであると認識されていた。そのため、研究テーマ設定に関わる指導は、指導全般においても肝要であり、困難なものと位置づけられていることがわかった。

リサーチ・クエスチョンの①については、院生の社会人経験等の背景によって多少異なるものの、特にテーマの絞り込みに関して共通の困難点が見られた。もともと大学院入学時に明確なテーマを持ち、高い問題意識を有する場合は別として、経験不足や関連知識の不足のため、論文スキーマ形成に時間を要するものであった。テーマの絞り込みがなかなか厳密に行えない場合、および、方法の好みや希望によってむしろテーマを変更しようとする場合のある

ことが指摘された。

また、協力者の語りに現れていた上記の背景として、院生は先行研究の熟読が不十分であり、かつ、そのために自身の研究の位置付けが成功しないまま調査に進もうとする傾向が見られることである。そのような場合、協力者は、まず自身で検討するように強く促すが、辛抱強く指導を繰り返す間に、時には指導の意味を再考することもあるという。さらに、院生の修了に対する見込みの楽観視についても語られ、修了に対する指導教員との温度差も見られた。

リサーチ・クエスチョンの②については、4人に共通していた信念は、院生が苦慮している場合に、安易に教員が「答え」や「選択肢」を提示するのではなく、院生に熟慮を促すことである。協力者はいずれも、自分の論文のものとしてテーマは自分で決定することを前提としている。また、決定までの期間、時間を要するものの、多くの文献を深く読んで研究の位置付けをはかることを重視していた。つまり先行研究の読解を重視し、それによって研究テーマに関する視野の拡大と熟慮をも促しているものと考えられる。院生の中には、テーマを迅速に決めてすぐに調査や実験に移ろうとする「せっかちな学生」が多いとの指摘もあり、そのような場合も、教員が文献を一緒に読もうとしたり、個別指導で共に検討を進めたりといった方法を採用しているケースも見られた。

院生の背景や抱える問題は多様であることが容易に推測される。それらに対応して、4名の協力者は、院生へのメンタルケアにも注意を払いつつ、院生が研究の世界に一歩ずつでも入っていけるように尽力している状況が明らかとなった。

こうした研究指導を行う教員は、今回は10年以上の経験を持つ協力者であったが、時間の経過とともに、教員自身の信念やそれに基づいた指導方法も変化する可能性があり、また対応方法を増やしたり細やかにしたりする場合もあるだろう。教員同士の情報交換に基づいた協働の可能性も考えられる。さらに、研究指導に関しては、母語や地域を問わず、共通する困難点があるものと推測される。今後も、研究指導全体を包括的に捉えつつ、教員自身の信念や行動について、さらに範囲を広げ、かつ、質的に深く分析を進めることが課題であると考えている。

**謝辞**

ご多忙の中、本研究の調査協力を快く引き受けてくださったタイの大学の4名の先生方に、心から御礼申し上げます。

**付記**

本研究は科学研究費補助金基盤研究（C）「論文執筆能力向上を目指す大学院生のための論文スキーマ形成を促す研究支援方法の開発」（課題番号：25K04210, 研究代表者：村岡貴子）の助成を受けて行った。

**注**

1） 一方、中山・舟島他（2015）では、博士後期課程の大学院生を対象とした調査を行っている。

2） 佐藤（2024）では、リサーチ・クエスチョンを設定して研究を進めていく過程において、再度リサーチ・クエスチョンを見直し、磨き上げていく場合があると指摘している。このように、研究テーマが決定された後にも、リサーチ・クエスチョンはその最適な表示のために再考を必要とする場合があるが、その点については、機会を改めて議論したい。

3） 日本の人文社会系の大学院で「ゼミ」と呼ばれることが多い研究指導の機会は、タイの大学では一般的に、「セミナー」と呼ばれている。

**参考文献**

石黒圭（2021）『文系研究者になる ―「研究する人生」を歩むためのガイドブック ―』研究社.

大谷尚（2019）『質的研究の考え方 ― 研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会.

大谷尚（2008）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案 ― 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き ―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』54, pp.27-44.

甲田直美（2024）『大学で学ぶアカデミック・ライティングの教科書 ―〈書く力〉を引き出す問い109 ―』ひつじ書房.

佐藤郁哉（2024）『リサーチ・クエスチョンとは何か？』筑摩書房.

佐渡島沙織・吉野亜矢子・大崎善治（2021）『これから研究を書くひとのためのガイドブック第2版―ライティングの挑戦15週間』ひつじ書房.

佐渡島沙織・宇都伸之・中島宏治編著（2025）『レポート・論文をさらによくする「観点」ガイド ― 学習と授業作りに役立つ25の観点』大修館書店.

Soysuda Na Ranong・村岡貴子（2024）「大学院生における論文執筆上の困難点と課題 ― タイの大学院生への質問紙調査から ―」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』28, pp.

35-45.
中山登志子・舟島なをみ他７名（2015）「大学院看護学研究科博士後期課程に在籍する学生の博士論文作成過程の経験」『千葉看護学会会誌』21-1，pp. 33-42.
中山登志子・舟島なをみ．（2023）「看護学の修士論文指導に携わる教員が直面する問題の解明」千葉看護学会会誌，28-2，pp. 39-47.
向井留美子（2018）「日本語で学位取得を目指す大学院留学生への指導・支援の課題：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部における実践を通して」『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』東京大学文学部次世代人文学開発センター 編 31，pp. 49-62.
村岡貴子（2014）『専門日本語ライティング教育 ── 論文スキーマ形成に着目して ──』大阪大学出版会．
村岡貴子・Soysuda Na Ranong（2024）「タイの大学院生の論文執筆上の困難点と課題 ── 研究支援に必要な視点を求めて ── 」『Thammasat Journal of Japanese Studies』41-2，pp.92-110.

**巻末資料**

資料1　SCATの手法を用いた分析の事例（協力者A）

| テクスト | 〈1〉テクストの中の注目すべき語句 | 〈2〉テクスト中の語句の言いかえ | 〈3〉左を説明するようなテクスト外の概念 | 〈4〉テーマ・構成概念 |
|---|---|---|---|---|
| 学生の個性やバックグラウンドを尊重することですかね。あと一緒に考えるという姿勢ですね。指導というよりも、学生が自分の力で考えて自律的に進められるように支援することを心がけているつもりです。 | 学生の個性やバックグラウンドを尊重すること、一緒に考えるという姿勢、指導というよりも、学生が自分の力で考えて自律的に進められるように支援すること。 | 大学院生の個性や背景、教員と大学院生が共に検討する姿勢、自律性涵養、大学院生への支援 | 大学院生の個性、研究者の背景、ビリーフ、協働、自律性、自律的学習支援、研究支援 | 【大学院生が持つ個性や背景の尊重】【教員と大学院生が協働しつつ検討する姿勢】【学生の自律性涵養への支援】 |